別府大学
NOV.21.1984
図書館

佐伯史談

第九十八号

「郷土史研究」通算第百二十号

昭和五十年一月廿五日 発行

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字稲垣字龍護寺 羽柴方

論説

年頭所感

佐伯史談会
会長 髙木嘉吉

人は何のために生れて来たのか。これは哲学や倫理学などの、千古の大命題である。私の手におえる問題ではないが、私は、私なりに次の様に考えている。すなわち人は働くために生れて来たのだ、と。

われわれは生れる時にそんな自覚をもって生れたわけではないが、人生のいろいろな問題について考えるようになって、この結論に到達したわけである。自覚を持って働らくということは、他の動物にはないことであって、これが人類と他の動物とを区別する、最も大きな相違点であると思う。

人は何のために働くのか。これは人それぞれ答が異なるだろうが、私は、人は文化を創造するために働くのだと思っている。人間が自然に働きかけて、価値あるものを創造する。たとえば、農業などは典型的な第一次の文化である。

文化には、働くこと即ち文化活動と、働いた結果生産したもの即ち文化財の二面がある。今日は非常に文化が発達し、複雑多岐にわたっているが、人は働くことによって、何らかの形で文化の進展に貢献しているわけである。

生命の起源、これも私などの手におえる問題ではないが、進化論に教えられてその起源をたずねても、最初の生命が生じた点は、神秘のベールに包まれていて、よくわからない。

しかし無から有は生じない。原因のない結果は考えられない。生命が生ずるためには、その源がなければならない。

その根源を私は大生命と名付ける。我らの宇宙に宿る大生命は、進化論の教える最初の生命とし

本号の内容

巻頭 年頭所感（会長 髙木嘉吉）…一
巻頭 三の丸橋門の修築について（羽柴弘）…二
研究 明治初期の学校教育史（山内武麒）…三
特別寄稿 立石と堵方惟栄（伊東利）……六
表 公害と環境（平川繁）……八
研究 横川先生と佐伯史（山本保）…九
解説 取壊される三神御門……一三
報告 新原町の古墳発掘（市野國仁）…一四
報告 びろうの葉陰の古塔（羽柴弘）…一八
巻頭 入津湾の大漁暦表（富沢泰）
「ヨーヤラジョー」考……一九
資料 中間金当座帳（安部弥右衛門）……二三
解説 くいさき六御崎山（鷹巣幸子）……二六
解説 出在寺参詣（山崎作一）……二七
（日々、いろいろ）……

て顕現し、以後進化を重ねて今日見る生物界となった。

この大生命は、人類に課するに、文化の創造をもってした。歴史をかえりみるとき、それは、人類の文化創造の足跡ともいえる。古今東西、幾多の民族が興亡をくり返しているが、その興るのは文化創造の使命を担った時であり、その亡ぶるのはその使命の終った時である。大生命は、冷厳に文化の創造を基準として、民族の興亡をつかさどっている観がある。

ここで文化財についてもう一度考えてみたい。私が前にのべた文化財は広義のものであるが、ここにいう文化財は狭義のもので、文化財の中のエキスとも言うべきものである。文化財は一度失ったら、再び手にすることは出来ない。文化財保護の大切なゆえんである。

私たちは、昨年末三の丸櫓門の修復に取り組んで今日に至った。

櫓門は寛永以後の、佐伯藩政を語る貴重な文化財である。そういう認識のもとに事を進めたのであるが、幸いに各方面の理解協力を得て、修復も工程の八分を終わり、竣工の日も近い。

櫓門の修復を私たちの文化財の探究と、その愛護保存の一里塚として、さらに深く、広く、温故知新の旅を続けたいと念じている。

（おわり）

報告

三の丸櫓門の修葺について

保存会事務局長　羽　柴　　弘

昨年十一月十二日起工式挙行、引続いて着工した櫓門の工事は、順を追い、慎重に復元の作業を始めた。施工者曽宮建設の誠実入念な解体瓦一枚一枚の洗いあげ、値段を問わない垂木や桧皮の使用、特別な建造物であるが故に、慎重に復旧工事をすすめ、旧臘十八日、見事に瓦の葺上げまで終った。明治以来百年余、間に合わせの小修理ですまし、老朽の姿見るべくもなかった櫓門が、今は新春の陽光の下に、毅然と堂々の威風を示している。

この間、連日寒風の中に身をさらし、工事の監督指導に当った清田義雄会員のあったことを知らねばならない。その時、その場で適切な督励と助言を与えてくれたことは、保存会としてありがたい限りであった。特記して会員の皆さんに報告したい。

工事は、今、冬休みの格好で中断している。それは瓦土の乾燥を待ち、あるいはきびしい寒気による、漆喰の凍結のおそれや、作業の困難さを考えてのことで、つまり確実・入念な施工を願ってのことである。

一か月半ほど休んだ上で、二月に入ったら左官による漆喰工事が、二月一杯かかる見込み。櫓門内部の補修の木工作業もはじまるが、この方はすぐ終るとのこと。外に付帯工事も考えているが、いずれにしても二月一杯で出来あがる予定である。

二月四日が立春、日一日と暖かさを増す、日も長くなる。早春の陽にかがやくような、まっ白く仕上げられる漆喰作業のはかどりが、目に見えるようである。

三月の上旬、うららかな日に竣工の式を挙げ、修復工事の完了した時点で、毛利家から佐伯市に、この櫓門を寄贈していただく——そう取り進めるつもりである。

（付記）史談会員の櫓門修復工事についての御寄付は、なるべく二月の中頃までに保存会事務局の私方へ、郵便振替可。